平成14年度　名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター心理発達相談室活動報告

平成14年度は，当心理発達相談室にとって激動の年であった。教育発達科学研究科の耐震工事が始まるに伴って，当相談室も改修工事を行うことになった。その結果，10月から半年間の改修工事中は，附属学校のスペースを間借りして行った。半年間に引っ越しを2回も体験した。引っ越しの準備は大変であったが，スタッフは係の分担を行い，連携を取りながら事態に対処した。移転中の半年間，大きなトラブルもなく，無事にしのげたのは，ひとえに関係者の尽力に寄るところが大きい。また，相談室以外の様々な場所では，多方面にご迷惑をおかけしたかもしれない。この場を借りて，お詫び申し上げます。

改修工事後の相談室は，大きく生まれ変わった。外壁は，教育学部と同じ色である白に統一された。新たに面接室が3つ増設され，面接室不足の悩みは一気に解消した。新しくなった新相談室で，相談活動を再開することができた。

加えて，平成14年度は引っ越しの他に大きな出来事があった。昭和50年より27年間にわたって当相談室を導き頂いた田畑治先生が，平成15年3月に退官を迎えられた。先生の人柄に惹かれて心理臨床の道を志した者も多く，相談室にぽっかりと大きな穴があいてしまったようである。改めて田畑先生の暖かさと，存在の大きさを身にしみて感じている。今後は，田畑先生から学んだことを糧としながら，スタッフ一同，相談室における心理臨床実践活動を充実させなければならない。

I　相談員の構成

平成14年度の当相談室の人的構成は、教官8名、面接指導員13名、大学院研究生4名，大学院生62名、事務職員2名であった。さらに、相談室OBで現在もケースを担当するなど相談室に関わる嘱託相談員16名を含め、総勢89名からなる。室長は森田教授がつとめた。文末の表6に平成14年度の相談室構成員の名簿を示す。

II　相談活動

1．平成14年度新規相談受理件数

平成14年度の新規受理面接者数は、表1に示すように年間83名である。昨年度の105名より，約20名減少し，2年前の水準とほぼ同じとなった。要因としては，愛知県内の他大学が新たに相談室を開設したり，スクールカウンセラー活動が根付いてきたなど，地域での受け皿が増加したことがあげられる。また，当相談室の引っ越し作業のため，短期の閉鎖を2度にわたって行わなくてはならなかった点も挙げられよう。年齢別に見ると、12歳以前（幼児・児童）と13歳以降（中学生～成人）の割合は4：5である。性別については，ほぼ半数ずつとなっている。

相談内容別の人数は、表2および表3にまとめた。12歳以前では情緒障害が20名で56％と半分以上を占めていた。一方，発達障害が16人で44％を占めており，昨年度の65％からは減少した。13歳以降の相談内容については，家族関係などの問題から子どもに関する問題まで，多岐に渡っていた。

表2　12歳以前の相談内容別受理面接数

診断（主症状）	件数（%）
発達障害	16（44）
自閉症	9
精神発達遅滞	4
学習障害	0
注意欠陥・多動性障害	3
情緒障害	20（56）
不登校	4
集団適応・対人関係	2
チック・吃音	0
その他	14
計	36（100）

表1　平成14年度　受理面接ケースの年齢，性別

性別／(年齢)	乳幼児（0～3）	就学前（4～6）	小学生（7～12）	中学生（13～15）	高校生（16～18）	大学生・成人（19～　）	計（%）
男	1	8	14	2	2	12	39（47）
女	2	3	8	2	2	27	44（53）
計	3	11	22	4	4	39	83（100）
(%)	44（42）			61（58）			

表3　13歳以降の相談内容別受理面接数

相談内容	件数(%)
不安神経症	1 (2)
境界例	2 (4)
うつ病	2 (4)
性格について	8 (17)
不登校・学校不適応	5 (11)
対人関係	7 (15)
家族関係	5 (11)
夫婦関係	0 (0)
摂食障害	4 (8)
子どもの問題	13 (28)
子どもの不登校	6
子どもの対人関係	2
子どものその他	5
その他	0 (0)
計	47 (100)

2．平成14年度面接種別相談受付件数

本年度の面接種別相談件数を月別にまとめたのが表4である。年間の相談件数は3,291回であり，平成13年度の3,158件から若干増加した。面接種別では、「臨床心理面接」がおよそ1,300回，「遊戯面接」がおよそ1,200回で大部分を占めていた。次いで「並行心理面接」（子どもの面接と併行する親面接）がおよそ720回で，平成13年度より約100回増加した。

月別の相談件数の推移を見ると、「臨床心理面接」「遊戯療法」はおよそ毎月 80～120回、「並行心理面接」はおよそ50～70回の間で、ほぼコンスタントに継続面接が行われていることがうかがえる。家族合同面接は，平成13年度と同程度の22件となった。「検査面接」（各種知能検査、ロールシャッハ・テストなどの人格検査）は、年間で23回と，平成13年度より若干増加した。

Ⅲ　研究活動

当相談室における主な研究活動としては、リサーチ会議、各種研究会の開催、相談室紀要の刊行があげられる。

表5に、本年度のリサーチ会議の実施状況を示した。リサーチ会議は当初、スタッフの事例研究や臨床心理学的調査研究などの発表の場として設けられた。近年の傾向として、集中講義に来られた先生方や近隣の臨床家の方々など，相談室外の方を講師として招く形式が増えていた。ところが，平成14年度は，教官スタッフによる発表が2回，後期課程の院生スタッフによる発表が1回と，内部スタッフによる発表が半分を占めた。本来の目的であるスタッフの発表の場として，リサーチ会議が機能しだしたと言えよう。今後は，博士後期課程の院生スタッフによる発表の増加が期待される。相談室スタッフの研究活動の促進は、実践活動を深めていくことにもつながると考えられるので、リサーチ会議のより積極的な活用を進めていきたい。

学外での相互研鑽の機会としては、例年、心理教育相談室をもつ国立五大学（東京大学、京都大学、広島大学、九州大学および名古屋大学）の大学院生が主体となって開催されている「五大学院合同事例検討会」がある。平成14年度は東京大学が主幹校となり7月に江ノ島にて開催した。他大学のスタッフと臨床研究および実践についての活発な意見交換を行い、親睦を深め、非常に有意義なものとなった。

スタッフ個人またはグループによる学会発表や専門誌への論文投稿については、相談室としては数を把握していない。最近，スタッフの中で，積極的に専門誌に投稿しようとする動きが広まりつつある。実際，投稿論文が受理されるケースが，以前よりも増えてきた。投稿経験者に刺激を受けて，他の者が学会誌に投稿をチャレンジする様子も見られている。非常に好ましいと考えている。今後，このような動きがますます活発になり，名古屋大学からの研究成果の発信が増えることが期待される。

Ⅳ　教育・訓練体制

当相談室の教育・訓練体制の中心に位置づけられるの

表4　平成14年度　面接種別相談受付件数一覧

面接＼月	平成14年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平成15年 1月	2月	3月	合計
受理面接	8	5	5	11	5	7	6	7	9	6	9	5	83
ガイダンス面接	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
検査面接	2	2	2	1	3	2	3	3	0	0	0	5	23
遊戯面接	105	123	115	120	85	123	91	100	99	93	107	118	1,279
臨床心理面接	118	110	111	92	74	95	87	89	92	91	102	104	1,165
並行心理面接	64	72	70	50	54	59	62	58	55	48	60	67	719
家族合同面接	4	2	3	2	2	1	1	3	0	0	1	3	22
計	301	314	306	276	223	287	250	260	255	238	279	302	3,291

表5　平成14年度　心理発達相談室リサーチ会議一覧

	演　　者（所　属）	題　　目
第1回（2002年5月17日）	堀　英太郎氏（名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程後期3年）	「書痙」を主訴に来談された20代男性との面接過程
第2回（2002年7月12日）	Ian Brockington 氏（University of Birmingham Emeriting Proffessor　名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター客員教授）	The Methodology of Clinical Research（臨床精神医学研究の方法論について
第3回（2002年12月6日）	平石　賢二氏（名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授）	アメリカの学校で実践されている予防・発達促進的心理教育プログラム
第4回（2003年1月24日）	多田　元氏（名古屋弁護士会）	子どもの虐待と対応
第5回（2003年2月28日）	金井　篤子氏（名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授）	キャリア・アカンセリングの理論と実際
第6回（2003年3月28日）	金生　由紀子氏（北里大学大学院医療系研究科医療人間科学群発達精神医学助教授）	チック症とトゥレット症候群について

表6　平成14年度　心理発達相談室スタッフ

教　　官	森田美弥子（相談室長） 田畑　治・蔭山　英順・本城　秀次 金井　篤子・村瀬　聡美・平石　賢二 金子　一史
指　導　員	赤塚　大樹・池田　豊應・石川　雅建 伊藤　義美・生越　達美・川瀬　正裕 後藤　秀爾・佐藤　勝利・杉村　和美 鶴田　和美・西出　隆紀・西出　弓枝 山口　智子
相　談　員	荒井　紫織・飯野　祐可・今村由木子 奥野　光・笠井央理恵・加藤　彩 小石亜希子・河野　荘子・滝澤　香苗 武内　良恵・築山彩智子・丹羽早智子 堀　美和子・宮本　淳・渡辺　恭子 渡邊　玲子
大学院研究生	渡辺　由己・瀬地山葉矢・佐々木靖子 宅　香菜子
大学院生ＤＣ	今尾　真弓・葛　文綺・松嶋　秀明 石原眞紀子・加藤　容子・清瀧　裕子 橘　浩太・堀　英太郎・宮崎　朋子 大杉　真紀・佐々木美恵・鈴木英一郎 高城絵里子・西原　ゆき・西村もゆ子 ニラーチュー・服部　陽子・原田　一郎 松本真理子・李　明憙・伊藤　美紀 乾　哲郎・北出　薫・坪井　裕子 鶴田　一郎・畠垣　智恵・福元　理英 水谷みゆき・細野　久容
大学院生ＭＣ	稲垣　悪里・笛吹　素子・大崎　園生 久利　恭士・小島美由紀・古山知恵美 鈴木　真之・須田恵理子・竹内　千絵 得能　千代・友松香寿美・浜本真規子 平松　佳子・三輪紀久子・横井麻衣子 吉橋　由香・雑賀美希子・于　泳 上杉　春香・大賀　梨紗・大林　加奈 木村　新子・桑畠　愛・小林佐知子 駒井恵里子・田中奈美子・田中　伸明 塚原　睦子・戸田　雅子・内藤　和代 中島　英貴・廣田希代子・溝口　美鈴
受　　付	神谷　由美・竹内　康子

は、ケース会議である。ケース会議は原則として毎週金曜日の夕方5時半より開催されていた。ニュー・ケース報告や諸連絡事項の伝達を行う全体会の後に、3分科会に分かれて約2時間をかけてケース検討を行っている。ケース会議は、大学院の「臨床心理学研究実習」として位置づけられた。この「実習」には当然のことながら、相談ケースの担当（臨床実践）とそのスーパーヴィジョンを受けることが含まれている。

スーパーヴィジョン制度は、ケース会議と並んで、相談活動の実をあげるための大きな柱である。新規スタッフについては、それぞれ特定の本相談室教官がスーパーヴァイザーとなり初年度の臨床実践指導を受けることが必須とされ、またそのほかの大学院生スタッフも、ケースごとに教官もしくは学外の臨床家によるスーパーヴィジョンを受けている。

相談室以外の教育訓練の場としては、田畑教授の指導の下に大学院生数名が、教育学部附属中学校・高等学校における教育相談活動（よつば相談室）を行っているほか、学校実習、病院実習、情短施設における実習などがカリキュラムの中に位置づけられている。

V　その他

名古屋市児童福祉センター主催による児童相談機関連絡会議に，当相談室代表として室長である森田教授および金子助手がそれぞれ出席した。相談機関同士の連携に関しては，これまで個人レベルでのつながりが主体であったように思われる。しかし，児童虐待に代表される難しいケースが増加している社会情勢を考慮すると，上述のような組織的な連携は，ますます重要になってくると思われる。

（文責　金子一史）